

『世界サバ宣言』

ぼくは、みどり町東小学校に通っています。小学3年生です。ぼくには楽しみにしていることがあります。それは、毎年夏に行われるサバ祭りです。

サバは、お魚のサバです。焼いたりお寿司にしたりして町中のみんなでわいわい楽しく食べるのです。他にもたこ焼きや綿あめのお店やら、たくさんの出店が出て。テレビの人もたくさんやってきて、サバのかつこをした人たちが踊ったり歌ったりして。終わり頃には大きな花火もやるし。お祭りは楽しいな。

でも。

最近ぼくの周りの人がへんなんです。学校の友達にサバ祭りの話をすると、

「サバ祭り？なにそれ？」

「おまえ、なに言ってるの？」

と言われるのです。

みんなどうしちゃんたんだろう。あんなにサバ！サバ！と言っていたのに。みんな飽きちゃったんだろうか。だとしたら寂しいな。

家に帰って、お父さん、お母さん、お姉ちゃんに聞いてみても同じような感じですよ。

「何のこと？お母さーん、ながおがへんなこと言ってるよ。」

え？去年はお姉ちゃんも一緒に行ったじゃないか。一緒にサバ祭りの歌も歌ったよ。

「サバ、サバサバーって。」

「ながお、いいかげんになさい。お姉ちゃんを困らせてはダメよ。」

だって・・・

「ははは。良いじゃないか。きつとながおは、想像力がたくましいんだな。でも、みんなを困らせないようにな。」

とかなんとか。

うーん、みんな全然分かってない。

本当にどうしちゃんたんだろう。

よし、きつとみんな忘れてしまったみたいだから、何とかして思い出してもらおう。そうだ、こないだ学校で習った「世界平和宣言」みたいにして、「世界サバ宣言」を作れば良いんだ。そして町のあちこちに張って見てもらうんだ。

まず、何を書けば良いのかな。

サバというのは生き物です。生きています。

生き物の中もお魚の仲間です。

ここにサバ宣言を発表します。

うーん、これで良いのかな。何か足りないような。もうちょっと考えてみようかな・・・

ほら、早く支度しなさい。学校に遅れるわよ。

「(もぐもぐ) はい。」

トマトのサラダもちゃんと食べるのよ。

「はい。(もぐもぐ)」

あっ、そうだ、良い？ながお、このプリント、学校に行ったら先生に渡しておいてね。

大事な家庭訪問のプリントだから絶対に先生に渡すのよ。あとね、昨日みたいにヘンなこと言っつて、先生やお友達を困らせてはダメよ。

「ヘンなことって？」

その、サバが何とかっていう話よ。

「えー、だってだって本当のことじゃないかー。」

もう、またそんなこと言っつて。

「はいはい、分かりました。ちえっ、家庭訪問嫌なんだよな。分かったよ。行ってきまーす。」

こら、何ですか、その口のきき方は！あっ、待ちなさい！

「行ってきまーす。」

もう、まったく・・・

本当にあの子ったら、最近どうしたのかしら。

♪フンフン、サーバ、サバサバ

あら嫌だ。あの子の鼻歌がうつったのかしら。それにしても、サバって何のことなのかしら。サバ・・・サバ・・・やっぱ何のことか分からないわ。

でも、遠い昔にどこかで聞いたことがあるような、どこか懐かしいような、そんな響きがないとは言えなさそう・・・

よし、ここなら誰もいないな。(ごそごそ)。昨日書いた「世界サバ宣言」を学校の中に張るんだ。家からテープも持ってきたし、これで張って、みんなに思い出してもらうんだ。

ふうー、ただいまっ。今日の買い物は大荷物。ちよつと買い過ぎたかしら。もう四時半ね。

♪プルルルプルルル

あら、電話だわ。はいはい、ちよつとお待ちを。(プチ)

はい、もしもし、はい、ああ、ながおの担任の。いつもながおがお世話になっております。はい、はい、いえいえとんでもございません。ええ、はい、えっ、ながおが？え、本当ですか？それはそれは大変申し訳ありません。ええ、いえ、そのような様子は・・・厳しく言い聞かせておきますので。ええ、はい、なにとぞよろしくお願い申し上げます。ええ、はい、本当にご迷惑をおかけしました・・・

・・・あの子が・・・学校の掲示板に、いたずらの張り紙をしたって・・・

(ガチャ) ただいま。

「ながお！ちよつと来なさい。」

うん。

「さっき先生から電話があったわよ。学校でヘンな張り紙したって。」

ヘンな張り紙じゃないよ。

「良いから！なんでそんなことしたの！」

・・・

「黙ってたら分からないでしょ！」

だって・・・

「だってじゃないでしょ！」

だって、みんなサバのこと忘れちゃったんだもん。だから・・・

「サバ？まだそんなこと言ってるの？みんなに迷惑かけちゃダメって言ったでしょ！」

だって、みんな忘れちゃったんだよ！サバってお魚なんだよ！みんな食べてたんだよ！

「この子ったら・・・」

よく食べてたし、お祭りだってあったし、踊りだってあったし・・・

「もう、まったく・・・(！) お魚？よく食べてた？そう言えば、最近スーパーの魚の種類が心なしか少なくなつたような。まさか・・・この子の言う通り、本当に周りの人が忘れてしまったということ？」

ごめんなさい。もうしません。

「そ、そう・・・分かったら良いのよ。」

(もしも、もしも、あの子の言うことが本当だとしたら。なぜかは分からないけど、町のみんなの記憶が同時に消えたのだとしたら。どういうわけか、あの子だけ忘れられないのであるのだとしたら。

そして、ここから先は考えるのが恐ろしいのだけれど、それが今も続いているとしたら。

今はサバだけだけど、これから先、他のものについての記憶も消えていったとしたら、そんなことってあるのかしら・・・

あの子は学校でも、同じように寂しい思いをしたに違いないわ。みんなから嘘つき扱いされて。一番近くにいる私が話を聞いてあげないと。」

ねえ、ながお。なんで、あなたはサバのことを覚えているの？

お母さんね、サバのことをよく覚えてないの。あなたの言う通り、お母さんたちがサバのことを忘れているかもしれないの。なんで、ながおだけ覚えているの？

「・・・」

さつきはお母さんが悪かったわ。ながおの言うことを全然信じてなかったわ。ごめんなさい。でも、今は違うわ。だからお母さんに教えてほしいの。サバって何なの？

「・・・サバは、お魚だよ。」

うんうん、それで？

「おいしいんだよ。すごく・・・それで・・・」

泣かないで。ごめんね。最初から信じてあげなくて。

お母さんに信じてもらえた。学校みんな、先生や友達に信じてくれなくても良いんだ。でも、本当にみんな忘れちゃったみたいだ。そしたら、お祭りはないのかな。寂しいな。

(もぐもぐ) お母さん、最近トマトのサラダないね。

「え？何？」

トマトだよ。トマト。

「トマト？」

え？トマトだよ。赤いやつだよ。

「赤いやつ？」

いつもレタスと一緒に食べてたやつだよ。知らないの？

「もう、いい加減にしてよね。あんた何言ってるのよ。」

お姉ちゃんも？本当に知らないの？

「ははは。ながおは想像力がたくましいな。でも、みんなを困らせてはダメだぞ。」

お父さんも？サバも知らないんですよ？今度はトマトも？お母さん、お母さんは信じてくれるよね。今度はトマトを忘れちゃったんだよ。きつと、学校みんなもそうなんだ。

「ながお、いい加減になさい。みんな困ってるでしょ。」

え？お母さん？サバは信じてくれたでしょ？

「サバ？何言ってるの？」

(二〇一〇年八月八日)